

「親密な昼寝を願っている昼寝」 小野寺 里穂（神奈川県）

なぜか気になる作品。言葉に多数の省略が隠れているのかもしれないが、字義どおり昼寝自体が願っていると考えられるのもおもしろい。

「聞き返す金平糖を期待して」 飛和（長野県）

言葉とは、本来、楽しみに待たれるもの——そんな思いにはっとした。

「湯豆腐を崩さないよう掬いとる／崩れたとこがわたしの痛み」 りんか（埼玉県）

心身のやわらかさと脆さが身近な「湯豆腐」に引き寄せられている。

「たくさん言わないことで／満ちていた／立冬の日の月は低くて」 波津 ゆみ（神奈川県）

「言わないこと」は消えてはいない。ときには暗喩となって言葉の裏側にまわっている。

「道すがら／車輪にからまる あかもみじ／わたしの居場所 ここにはないな」 五十嵐 香林（東京都）

「車輪にからまる あかもみじ」という何気ないものが、こころをふさぎ、道をふさぐ。ひとは日々傷つきながら生きている。

「じゃが芋のかたさは／正しいことを言う怖さと／同じ位の強（こわ）さ」 仮野（栃木県）

正義は取り扱い注意だ。正義の名の下ではひとはどんな残酷なこともおこなってしまう。

「文化祭一筆書きのように去り」 蛙多楓太（東京都）

一筆書き、という表現でしか捉えられない「文化祭」の本質がありそうだ。

「たましいと身体の接ぎ目／肌はぬるく／来世は冬の朝になりたい」 星谷 麦（東京都）

「たましいと身体の接ぎ目」とは新しい気づきだと思う。冬のぱりつとした空気のほうがそれを自覚しやすいということだろうか。

「来年の手帳カレンダーを母に／あげると私の未来も減る」 榎本 圭子（大阪府）

減る、という言葉がたしかにつかんでいるものがある。時間とは究極の「個人」かもしれない。

「追いかけてくるスーパーのポリ袋／犬みたいですよこしうれし」 オウチマツナ（宮城県）

スーパーのポリ袋にも命をかんじている。世界への愛着はいろいろなところに隠れている。

単にこちらの読み手の問題かもしれませんが、今月は心惹かれる作品が比較的少なかった気がします。次回も楽しみにお待ちしております！